研究報告

身体感覚からこころを探る

ピーター・スクリバーニック（トロント大学人類学科博士後期課程）
Peter Andrey SKRIVANIC

身体とこころの関係

日本の指圧療法と北米の指圧療法とは、どのように違うのであろうか。それは、療法士の教育に左右されるにちがいない。とくに身体とこころの関係を、単に神経・物質的な関係と捉えるか、それともさらにホリスティックな「気」を含む関係と捉えるか、その教育の違いに注目をしたい。人間のこころを理解するためには、機械で測定できる身体や脳と、機械だけでは測定できない心理・感情・負担など、双方の観点から研究することが必要であろう。私がこころの未来研究センターに来たのも、まさにその理解を求めたからである。

私は、カナダのトロント大学で人類学を研究しながら、トロント市の指圧療法士として実践してきた。英語で「分かる」(I understand) を「見る」（I see）と言い換えられるように、社会学者のミシェル・フーコーが40年も前に指摘したとおり、西洋科学は「視覚」を中心とするパラダイムとして発展してきた。だが東洋では、「分かる」のは目からだけではない。たとえば伝統芸においては、体得（身体で学ぶこと）が重要である。とくに、接触を重要視する針灸や指圧の分野では、目が見えない人こそ、相手の身体が分かる、とされてきた。はたして、西洋科学の視覚的パラダイムで、東洋的な人間理解を説明できるだろうか。逆に、指圧のような伝統治療法とその教育から、視覚中心のパラダイムに対するアンチテーゼ、ないしは包括的な見解を得られるのではないかと思い、センターでの研究を始めた。

対象のフィールドとしては、２つの指圧教育機関の協力を得た。一方は、規模の大きい専門学校で、他方は、実践者が集まる修業道場である。それぞれの指圧のツボ（腧）や凝り（コリ）の解釈の違いが、上記のパラダイムの違いを浮き彫りにする鍵となった。

目で見えない「気の身体」

指圧は、日本では国家資格を必要とする、厚生労働省に認定された治療法であり、その基礎教育においては、生物学をはじめ、科学的な土台が共通している。関節、筋肉、神経などの疾患を治すためには、徹底した基礎知識が必要不可欠である。そのためには、どの指圧教室でも、身体の図表が利用されており、患者の身体のどのツボをどのように押せば、どのような効果を得られるかを、視覚的に教えられる。同時に、指で相手の身体を押すことにより、少しずつ視覚以外の感覚を身に付けるようになる。ある学生は私にこう言った。「最初のころは、手で触れても堅い筋肉と骨の違いすら分からなかったが、3年経つと、筋肉の多くの層が区別でき、豆粒ぐらいの大きさの凝りもよく分かるようになってきた」。

指圧で言う「凝り」の理解は、時代によって変化している。江戸時代から戦前まで、「凝り」は「気や血の固まり」というように理解されていたのに対して、戦後、「筋繊維の固まり」という理解が主流となってきた。視覚的教育によってこの理解が強化されている。図表を見ながら、相手の筋肉を触る練習が始まり、「凝り」に出会うたびに、それを筋肉の図の上に当てるのである。しかし、すべての「凝り」が筋肉の固まりであることは、科学的な解釈とされているが、証明されているわけではない。目で見えない「気の経絡」という概念に基づいた一昔前の指圧は、「気や血の固まり」という発想で、同じ治療的効果が得られたのである。それに対して、現代の学生は、「筋肉と凝りは手で感じられるが、経絡は手で感じられない」と言い、経絡の発想を軽蔑的に扱っている。

その生物学的・視覚的教育に対して、別の修業道場では、「身体が気の影であり、気の身体はさらに大事」であるという。目で見える肉体以前に、目では見えない「気の身体」こそが精神と肉体をつなぐもので、「気の身体」の健康を正さないと、筋肉の凝りを表面的に触っても、疾患の原因を根本から治せないというのである。「気の身体」のパラダイムでは、筋肉の凝りより、エネルギーの門とされるツボの方が重要で、そのツボは筋肉のマッサージだけで知り尽くせるものではないとされる。むしろ、瞑想や想像のような訓練によって、指圧師の身体全体で相手の身体を感じ取り、そのツボや経絡を診たりすることができるようになるという。一見神秘的に思われるかもしれないが、異なる熟練者どうしが患者の身体に対して同じ見解を示し、同じ診断と処方にいたるのである。機械で見える「客観性」は証明されなくても、指圧療法士に見える「間主観性」が存在しているわけである。

唯物論的なパラダイムの限界を超えて

人類学者として、このような身体的観察をする道場に視覚的・西洋科学的パラダイムのみを押し付ければ、経絡とツボを中心に考える道場の語りをまったく理解できなくなってしまう。人間やこころを唯物論的に理解しきれると考えてしまうと、経絡やツボの存在は熟練者の「幻覚」として片付けてしまうことになる。だが、経絡やツボの指圧は、東洋の文化的遺産であり、それを唯物論で理解できないのであれば、むしろその唯物論的なパラダイム自体の限界を考え直すきっかけにしたほうがよいのではないかとさえ思われてくる。伝統芸的な指圧の道場から、20世紀の生物学に限定されないこころや気の理解を学び取ることができるかもしれない。

英語で学術論文を書く研究者としては、指圧師の学習と体得を英語で説明しなければならない立場にある。身体に注目する英語圏の社会学者は、つい「銘刻」(inscription) というような専門用語に頼らざるを得なくなるが、そのような表現にはどうしても唯物論的な比喩が潜在してしまう。現代の欧米の学者は、身体を対象にすればするほど、肉体だけに注目してしまい、異文化による異次元の理解を見失ってしまう傾向にある。むしろ物質に還元できない「こころ」というような表現が、人間の包括的理解には不可欠に思えてくる。

最後に、こころの未来研究センターの吉川左紀子センター長やカール・ベッカー教授、周囲のスタッフや泉谷泰行博士に、心より感謝を申し上げる。皆様のご支援とご指導がなければ、こころに関する比較文化的な研究はとてもできなかった。こころの未来研究センターは、実に国際的で先端的な研究環境であり、ますますのご発展を祈念するしだいである。

指圧師の指圧のようす（左）と学生の指圧のようす（右）

古典的な経絡図（『十四経発揮図譜』より）